

目的 高齢社会を目前にして、高齢期の生活基盤として住宅・居住環境をどう整備していくのかは大きな課題である。本研究では、1990年に全国に先駆けて住宅供給公社によって設置された有料老人ホームYにおいて、入居者を対象とした老後の暮らしや有料老人ホームへの意識、住み中心とする生活実態、要求等についての調査結果を報告する。考察にあたっては、筆者がこれまでに実施してきた1970～80年代に社会福祉法人によって設置された有料老人ホームの調査結果と比較・考察し、これからの高齢期の住まいについて示唆を得たい。

方法 調査は、公社を通して協力を呼びかけ、調査票を各戸の郵便受けに配布し、フロントに設けた回収箱に入れてもらうやり方をとった。実施時期は1991年12月4～12日である。配布数326、回収数174で、回収率は53.0%であった。

結果 回答者世帯の基本属性は、男女比約4:6、平均年齢69.1歳、二人(夫婦)世帯が約4割を占め、一人世帯の男女比は約3:7である。また、現役で働いている者が約2割を占める。健康状態については約8割までが「ふつう」以上と答えている。

Yホームの専用住戸は、これまでの調査対象と異なり、和室をもつタイプが少なく洋室の居間にベッドをおくよう想定されている。上框や和室洋室間を含めて段差が解消されている。洗面所と便所が一室にまとめられ、それが寢室から直接行き来できる等、様々な配慮がある。これらが入居者の生活にどのように生かされているか明らかにした。また、豊富に用意されている共用施設や、最も期待の大きな諸サービスの利用についても明らかにした。